
ばあちゃん

上村忍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ばあちゃん

【コード】

N69060

【作者名】

上村忍

【あらすじ】

年老いたばあちゃんのことを考える。

それは、同情なのか？それとも…

(前書き)

誰しもが考え、悩むこと。

乗り越える人もいれば、考えないようにする人もいる。

「だから、自分の親だろ！なんでそんな薄情になれんだよっ！」

と、言って壁までぶつとぶくらい殴られたのは、高3の夏だった。8月のだったのに、長袖を着るくらい冷夏だったのを覚えている。

半袖だったら、もっと痛かっただろうな。

擦り傷のできた腕を見ながら、そんなことを思ったことを覚えてい

る。
俺が高3の夏、我が家は引越した。ばあちゃんの近くに住んでいた俺達家族だったけど、相次ぐ不況の煽りを受けて、親父が飛ばされたのだった。

会社の持ち家が空き家になったらしく、破格で提供してくれるという話だった。マイホームの夢があったけど、ほとんどあきらめていた親父はこの話に飛びついたのだった。

ばあちゃんは、じいちゃんに先立たれて独り暮らし。

背中はずいぶん曲がっちゃったけど、常にエプロンをかけて、髪の毛を気にするおしゃれさんだった。

赤ん坊の頃から、ばあちゃんの家は俺にとって憩いの場で、日曜の昼ごはんだったら、ばあちゃんの家のお台所のテーブルにつくのが俺の定番だった。

日曜の昼ごはんはインスタントラーメン。ばあちゃんがお湯を沸かして麺を茹でる間、俺はどんぶりに卵を割って、ぐるぐるかき回しながら待っていた。

どんぶりにラーメンが注がれると、卵が固まる。それを見るのが好きだった。

汗だくになりながら、ラーメンを食べる俺に、ばあちゃんは決まって牛乳を出してくれた。冷えた牛乳。夏でも、冬でも、牛乳だった。

「牛乳を飲めば風邪をひかん」

根拠も何も無い、ばあちゃんの理論は当時の俺にとって絶対だった。牛乳を毎朝飲む、現在に至るまで習慣づいている。風邪はひいたけど。

俺が親父に殴られたのは、親父がばあちゃんを連れて行かないって言ったからだだった。

ばあちゃんはまだ元気だったし、俺の大学受験を控えてのことも考えての結果だったのらしいけど、当時の俺には納得が行かなかった。

家族が遠いところに離れて、独り寂しく暮らせばあちゃんのことを思うと耐えられなかった。

新しい家には余裕があった。ばあちゃん独りくらい、なんとか耐えられなかった。

さんざん親父を罵ったあげく、俺は拳をくらった訳だ。

その後、腫れたほつぺたのまま、ばあちゃんの家に行った。ばあちゃんも俺のほつぺたに当てる氷を用意してくれた。

用意しながら、ばあちゃんは言った。

「なんも心配しなくていいよ。私は、まだまだ元気だし。独りでもなんも問題ない。」

「だってさ、絶対独りで寂しいよ。」

「大丈夫さ。だから、たまには遊びにおいで。」

氷は熱を持った頬に心地よかった。

1年が過ぎ、俺は大学生になっていた。

夏に家族でばあちゃんの家に行く。俺は、大学の講義とかぶっていた。

その次の年はバイトがかぶり、その次の年はデートがあり、というように、俺はなんだかんだではあちゃんの家には行かなかった。

ただ、時折、電話はした。

「ばあちゃん、元気か？」

「ああ、元気だよ。たまには顔みせんさいよ。」

「ごめんね、なんだかんだで忙しくてさ。」

ばあちゃんの声はいつも変わらなかった。

俺は、大学を卒業し、就職した。

大した職種ではなかったけど、正社員になれた。その夏、俺は自分の車ではあちゃんの家に行った。

「いらっしやい。」

俺は愕然とした。

ばあちゃんの背は以前よりも曲がり、エプロンは汚れ、髪は以前よりも白髪が多くなり、一気に老け込んだ印象を受けた。

「和夫かな？」

和夫は俺の兄ちゃんだよ。

「ああ、雅彦か。よく来たね。でも、こんな忙しい時期にきていいのかい？大学つけるんだろ？」

あのとこのままだ。ばあちゃんの記憶はあのとこのまま、とまっていた。俺は涙が出そうになっていた。

あのとこの時から、なぜ俺は来なかったんだろう？なんで、もっとばあちゃんのこと考えてやれなかったんだろう？

「ラーメン食べるかい？」

と、言っただんぷりを出したばあちゃんの手は細く、かさかさだっ

た。

「雅彦は、ラーメン好きだったからねえ。」

どんぶりはホコリをつつすらとかぶっていた。あの頃から使っているどんぶり。

昔と同じように俺は冷蔵庫を開けた。

年季の入った冷蔵庫は、くさく、黄ばんでいた。中には八工の死骸なども入っており、とても衛生的とは言えなかった。俺は、卵を取り出すのをやめた。

ふと見た牛乳は、賞味期限が2週間も過ぎていた。

「はい、できたよ。」

俺は、泣いた。

ラーメンはまずかった。まずかったけど、食べた。

ばあちゃんは、しわくちゃの顔でニコニコしていた。

俺が泣いたのは、ばあちゃんがかわいそうだからだろうか？今までこなかった自分の情けなさのせいだからだろうか？

いや、違った。

俺は、この家を、ばあちゃんを嫌悪している。

優しく暖かかった記憶の中のばあちゃんと、今のばあちゃんを比べ、

認めることができないでいる。

「今日は泊まっていくんたる?」

かび臭い布団が頭をよぎる。にこった水の入った浴槽が頭をよぎる。

「いや、帰らなきゃならないんだ。明日、仕事があつてさ。」

明日は休みだった。

おぼつかない足取りで、ばあちゃんは俺を送ってくれた。

俺は、泣きながら家に帰った。

家に帰ると親父に言った。

「ばあちゃんの家のこと知ってるんだろ、なんとかならないんかな?」

「…ならないさ。」

「…そつか。」

その日以来、俺は不感症になった。

女の裸を見ても、何も起きなくなった。SEXももちろんできない。いろんなことを試したが、何かのスイッチが押されたように、もしくは何かのタガがはずれたように、俺の中の何かが壊れ、戻らなくなった。

心が傷つかないように何も感じなくなるのが大人だつて聞いたことがある。

そして、面白いことに、性欲を感じないようになるばかりか、感動をする力もなくなつていった。泣くことも、笑うことも、少しづつ少しづつなくなつていった。最後には、心が凍つてしまった。

俺も、何も感じないようになりたかつたんだらう。何も考えないよ
うになりたかつたんだらう。

周りの人間は一人二人といなくなつていった。もちろん家族は別だ
けど、その家族も俺より早くこの世からいなくなるのは、自然の摂
理だらう。

でも、不感症になつて、本当に良かったと思うことがある。

俺が年老いても、悲しむ人間が誰もいないだらうつてことだ。

俺は子どもを作ることはない。人を好きになるといふ感情がなくな
つたといふことは、恋人もできるわけがないと思つている。

と、いふことは、こんな想いをする人間を作らなくてすむ。

それは、この凍つてついた世界の唯一の慰めでもあつた。

(後書き)

自分の実家の冷蔵庫が、ばあちゃんの家冷蔵庫のようになっていました。

近々、新しいのを買ってあげる予定です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6906o/>

ばあちゃん

2010年11月3日19時35分発行